

国 語 科

国 語 表 現 力 を 高 め る 試 み

—— 高1の読解指導（現国、古典）を通して ——

鈴木洋一郎 齊藤 真子

〔I〕 現代国語における表現指導

—— 詩・小説・自伝教材の読解をふまえた鑑賞文の指導 ——

鈴木 洋一郎

序 テーマ設定の理由

国語教育における作文指導は、学習指導要領の中にも〈各学年10分の2以上にすること〉と明示されているが、その指導、評価などにおいては、必ずしも十分とは言えず、読解中心となりがちな現代国語7単位の中で、この作文の時間を計画的に設けて指導してゆくことは困難な実状であった。高度な教材内容を有する現代国語を生徒に汎く学習させ、その読解指導とともに、その教材を生かして作文させる。主題はどうか？ 題材の選び方は？ 構想の立て方、更に叙述、表現や推敲のしかたなどの観点をふまえて、生徒の作品を速読し、評価することは容易ではない。また、高校生の多くは、授業時の話しことばとともに作文嫌いであり、表現意識も低調である。

これらの生徒の意識、現状を理解し、表現力を高めるためには、素材を適確に与える——現代国語や古典の作品を素材として、感想文を書かせながら、読解を深め、作文指導を試みようとしたのである。

本 論

一．作文指導と読解指導

国語教室での〈表現—作文〉と〈理解—読解〉の関連指導は特に重要であり、小中学校側からは指導実践の結果が多数報告されている。これらは、いずれも表現、理解の二つの能力を一方を目的とし、一方をその手段として把握しているのではなく、相互に補うという形、即ち表現力を高めながら同時に理解（鑑賞）力を養うということを目指している。

戦後の国語教育は、〈読みかた〉〈書きかた〉という言語の指導〈法〉中心から、〈読むこと〉〈書くこ

と〉という生徒の〈言語活動〉の指導に中心が移ってきた。今回の指導要領の改訂では、小中高を通して、〈理解〉と〈表現〉の2項目に分けられ、豊かにして正確な表現力となりうる力つよい読解力を育成しようとしているのである。

二．〈書くこと〉に対する生徒の意義

作文（表現）指導するに当り、生徒の作文経験や意欲などの実態を把握することは必要である。高校生は作文嫌いであるばかりでなく、現代国語を積極的に予習をし、その結果を発表するということはほとんどない。宿題として与えられたものを、自習書や資料などをそのまま書き写すことが多く、誤字や宛字もあり、文脈にも一貫性が乏しい。このような表現力の低下は高校生の年代特有の現象と考える前に、教師の指導についても反省させられる問題をもっている。

○意識の調査

（資料1）のアンケート項目は、嘗て鹿児島県の公立高校で昭和42年の2度にわたり実施したものを参考にした。そして、本校生徒高1の100名（135名から）を抽出（男45、女55）これに無記入させ指導の一つの手掛りを得ようとしたものである。

○調査の結果（資料2）

調査の項目（A～I）については次の通りである。

- A 原稿用紙の使い方、記入のしかた。
指導を受けていないものが多い。
- B 年間の作文の提出数については
提出は少く、2～3回で、過半数を占めている。
- C 作文力がついたと思われる時代は、
小学校時代であった。これはこのころは極く自

然に自己表現ができ、また興味をもっており、素直に書き表す時期であったと言いうる。

D 長文を書く興味

長文（原稿用紙9枚以上）を書いたものが、予想外に多い。これは、自由題で書くためでもあるが、生徒には動機をさえ与えてやれば書く力が十分あることもわかる。

E 適当な用紙枚数は、3～4枚である。

F 作文力は、国語の授業、作文などの特設の時間を通して養われるのは当然であったが、この外に読書によるというのも多かった。読むだけでなく、読んだ結果を作文するという指導の在り方も考えられる。

G 作文嫌が多い。

H 作文好きは、読書、新聞、雑誌などを読むものに多く、日常生活において日記や手紙を書く習慣や機会が少なくなっていることもわかる。従って嫌いなものは書く作業などを敬遠し、国語授業の進め方にも問題を残している。

I 作文嫌いの分析。日常書く習慣ができていない所謂「書かず嫌い」のものが多く。これらは、自分を取りまく生活のいろいろな経験の中から書くべき素材（話題）の少ないためでもあるが、積極的に発見しようとする努力が乏しく、また意識も低く、これらをまとめ書きあげる表現力にも問題がある。何のために、何を書こうという目的意識を明確に与えていくことが指導上の課題であると痛感する。

以上のアンケートの結果に基づき、表現力を高める試みの一つとして、作品（教材）の読解指導を更に進めて、読解後の感想、鑑賞の結果を作文させることから始めようとした。現代国語においては、詩・小説・伝記などの教材をとりあげ、人間のさまざまな生き方を読みとり、その感動のあとを確かめることにした。

三. 指導の実際

文学作品の鑑賞指導では、読後の感想を書かせたり口頭で発表させるこの一次感想を生かしている。そして、感想の発表は高校生の場合、口頭よりも文章を書かせた方が、よりよく考え、また十分に発表でき、評価、指導しやすい。高校入学当初、感覚の新鮮さ、積極的に読める教材として適切な、中原中也の詩〈北の海〉と芥川龍之介の小説〈羅生門〉をとりあげた。更に、夏休の宿題としては、宮本常一の自伝〈私の祖父〉を読ませた後で、肉親からの〈聞き書き〉の方法で作文させ、作品を提出させた。〈祖父母〉を題にしたものは75%（その中90%は祖父）、〈父母〉を題にしたものは、25%となっている。これら三編の作品はいず

れも現代国語の教材の中から選んだものである。

㊦ 中原中也の詩〈北の海〉の指導

（教材観）

この詩は3連の短いもので、用語はやゝ象徴的でなじみにくく、イメージも暗いので生徒にとっては読みなれない点があったが、自分自身を考える教材として適切であった。またこの詩の先行教材として羽仁進の〈自立と試行〉という文章があり、この中で若者が孤独に耐えながら自己－自我に目ざめやがて愛を発見するという青春の姿のトラマには、この詩と何か共通するものがあった。

（指導）

1. 朗読2～3回 短詩なので回数多くても可。

2. 一次感想（作文）を書く（資料3、生徒作品）

生徒の作品の中には、親しみにくくてよくわからないという違和感をもったものが予想通り多くあった。孤独、恐怖、寂寥ということばも目についた。しかし、細部を見ると、〈人魚〉は何を意味するのか、なぜ〈空を呪っているのか〉というような疑問も卒直に書かれていた。

3. 鑑賞指導（授業）

教師の鑑賞を強く印象づけないようにし、一次感想に表われた生徒の疑問に答える程度にする。

4. 二次感想（作文）を書く（資料4）

この作文は中間テストの答案という形で書かせた。従って生徒が自分の力で読み味わったものに教師の指導のプラスされたものになっている。生徒の読解力と教師の指導評価を兼ねたものである。一次感想にくらべ、内容形式ともに整っていた。

生徒の感想では〈人魚によって象徴される夢が空しく破れた痛々しい人生への怒りと絶望的な淋しさとが激情となって流れ出て、それが、メルヘン風のリズムに悲しくのっている〉という点が多く指摘されていた。

㊦ 芥川龍之介の《羅生門》の指導

1. 黙読 1回

2. 一次感想（作文）を書く（資料略）

芥川の最初の創作であって、青年独特の気負ったような知的スタイルと言葉づかい、用語特に古典的なものには、生徒は若干抵抗を感じた。しかし、「ある日の暮れ方である。…」で始まる書き出しの舞台設定や更に老婆との、〈ある異常な事件〉へと進展にともない刻々と変ってゆく下人の心理には妙に興味がかかっている。また、ひと休みするような説明的の文章とか、センテンスが短く、文体がきびきびと簡潔であ

ることなどは読みやすく、これらの中から最もおもしろい点を挙げて書くようにと指導した。

3. 読解指導(授業)

一次感想文など生徒の作品から問題になりそうな語を押さえながら、登場人物の置かれている状況を基点として、行動へとうつる下人の姿、心理の推移について、場面の展開ごとに理解させる。古典語についても説明を加える。ただしこの作者の主題は、各人の自由な二次感想にまかせるようにし、説明したり質問することはなかった。

4. 二次感想(作文)を書く

前の〈北の海〉の二次感想指導を考えて、計画的に作文させることにした。

(1) 書く前にメモをさせる。(資料5)

生徒は作文するとき、書く素材がないとか、その配列ができないなどと言う。その感想文作成にあたっては、書く素材(作品の鑑賞項目)を予め与えておけば、焦点が定まり書き易くなり、その項目についてメモさせる。

(2) 書く素材(A~H)を選ぶ

メモ用紙に素材項目のすべてを書かせた後、感想文を書くときに特に選んだ項目の記号を用紙の終りの()の中に記入させる。

生徒が感想文を書くときに選んだ素材の数や項目は次の通りであった。(資料6)

この数は1年全員135名から100名を抽出して調査した結果で、そのうち半数以上が主題中心に書き、中には(資料8)のようにこの主題1つにしぼって書いたものもある。

次に最も感動した場面(C)、更に独特の表現文体(F)などに関心をもっていることがわかる。

(3) 作文する(資料7、資料8)

自分が書こうとした素材項目を確実に把握しながら、その構成に注意させ、作文した後で、段落に素材項目がわかるように原稿用紙の上欄に記号(A~H)を書かせる。

5. 指導後の反省

二次感想文指導では、素材のとりあげ方に重点をおき、その相互関係や文章のまとめ方など、表現叙述は自由にさせた。素材を中心としていかに書くかにポイントをおいたのである。作文本来の指導からはこれらが総合的に計画的になされるべきであると思う。また素材重点という指導のために、予め項目を設定しておいて、それによって作文させるという一種の演繹的な方法をとったが、生徒が鑑賞すべき項目を自分

で考え、発見し、構想を立て叙述して、まとめて書くという帰納的な方法が望ましいものと思う。ここでは一つの試みとして前者に従って指導した。

㊦ 〈聞き書き〉の指導

これは、教材〈私の祖父〉宮本常一の文章を指導後、生徒の直接・間接の体験に従って書き上げた作文指導である。この教材は山口県の瀬戸内海側の孤島に生れた作者が祖父との出会いや成長する幼少年期の思い出を卒直鮮明に述べ、その中で島の風俗や自然を織りなし、また家族、肉親愛を自叙伝風に述べ孫(作者)の目から見た体験なのでわかりやすい。

1. 文章の〈読み〉の指導

2. 〈聞き書き〉の参考作品を読ませる。

昭和50年に本校で発行した〈礎〉(聞き書き作文集)には、中2の作品15編、高2の作品22編掲載されており、この文集を各教室に置き、〈聞き書き〉作成の参考作品とした。

3. 作文の指導

夏休の宿題として、参考作品や教材のようなスタイルの文章を書かせる。

4. 生徒の作品 (1部別紙 資料9)

別紙掲載の2編はその1部であり、いずれも事実を淡々としてさりげなく述べながらも、祖先を敬い、母を讃えながら、なつかしい親愛の情を添えているものである。

今後の問題

現代国語における表現力を高めるには……というテーマで、入学当初の生徒を対象に指導の結果を一つの試みとしてまとめてみた。初めて指導する生徒であるので、特に作文に対する生徒の意識実態の把握に努めた。自己表現に〈にがて意識〉をもつこの年代にとっては、その理由が素材難にあると思い、作文を創作中心の文に置かず、〈教材〉(作品)という素材を与え、また、その作文構想の素材にも、予め〈素材〉(項目)を与えることから出発し、自由選題という作文指導を避けた。これは、作文嫌いを解消する一つの試みとして実施した。また〈聞き書き〉方式による作文も比較的まとめ易い素材を得るものとして試みた。この方法は高1入学当初の作文指導特に表現意欲を高めようと思ってしたもので、これに続く指導方法をも今後の問題として考究してゆきたい。

国語表現力を高める試み

(資料1)

作文についてのアンケート

男 女

- A. 原稿用紙の記入
小・中て原稿用紙に書くさまりを習ったか
1 習った
2 習わなかった
- B. 作文の回数
中学では、作文を年平均して何回くらい書いて提出したか
1 1回 2 2回 3 3回
4 4回 5 5回 6 6回以上
- C. 作文力
いっところが(最も)ついたと思うか
1 小学 2 中学前期
3 中学後期 4 高校入学後
- D. 長文力
今まで書いた一番長い作文は何枚か
1 4枚まで 2 5枚 3 6枚
4 7枚 5 8枚 6 9枚以上
- E. 適当枚数
原稿用紙は何枚くらいが書きやすいか
1 1枚 2 2枚 3 3枚
4 4枚 5 5枚 6 6枚以上
- F. 作文力の方法
作文力はどういう方法でついたか
(3つまで選んでよい)
1 学校での作文 2 国語の授業
3 読書 4 新聞・雑誌
5 手紙・日記 6 その他
- G. 作文の好悪
作文を書くのは好きか、きらいか
※<どちらとも言えない>の項はない
1 好き(かなり、すこし)
2 きらい(かなり、すこし)
- H. 好悪の分析(1~5)
次の項目について、A(かなりあてはまる) B(すこしあてはまる)
C(あてはまらない) の記号を書け。
好き きらい(一方肖す)
1 読書をする 2 新聞雑誌を読む 3 日記をつける
4 手紙を書く 5 国語の授業は好き
- I. 作文きらいの分析
次の(1~11)から3つまで選べ
1 何を書いていいかわからない 2 書くのがめんどうである
3 どう書き表したらよいかかわからない 4 文を書くことに興味がもてない
5. 長い文になるとまとめられない 6 一つのことについて考えをまとめられない
7 すくれた文章とはどういうものかわからないことから書きようがない
8 字がへたである 9 人から読まれるのがはずかしい
10 文のきまりやはたらきを知らない 11 言葉を知らないから書きようがない

A		
B		
C		
D		
E		
F	○をつけよ	
	1	
	2	
	3	
	4	
	5	
G		
	1	
	2	
	3	
	4	
H	1	
	2	
	3	
	4	
	5	
I	1	
	2	
	3	
	4	
	5	
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
	11	

(資料2)

アンケート(資料1)の結果

人員 男 45 女 55

項目	調査
A 原稿用紙の使い方	習った 77 習わない 23
B 年間作文提出枚数(中学)	回数 1 2 3 4 5 6 % 3 18 36 17 6 20
C 作文力のついた時代	時代 小学 中前 中後 高 % 41 22 30 7
D 長文力	枚数 4 5 6 7 8 9 % 5 12 9 5 7 60
E 書きやすい枚数	枚数 1 2 3 4 5 6 以上 % 12 35 43 3 5 2
F 作文力のついたのは(3つ選ぶ)	学校作文 59 新聞雑誌 31 国語授業 33 手紙日記 29 読書 61 その他 9

項目	調査
G 作文の好悪	好き 36 きらい 64
H 好悪の分析	かなり すこし すこし かなり
	読書 33 43 13 11
	新聞・雑誌 44 44 8 4
	日記をつける 19 34 21 23
	手紙 27 22 24 23
国語授業 6 20 50 22	
I 作文きらいの分析(3つ選ぶ)	題材主題 36 よい文章構造 26
	書く習慣 45 文字 13
	構成力表現 44 読まれたくない 7
	興味 20 文法ことばづかい 8
	構文力弱い 42 語い量が乏しい 10

(資料3) (3人の生徒作品)

※ この詩は、人の孤独とさびしさを感じた。

海にいるのは魚じゃないとか、なんとなくひにくれていて人に対する愛情がなくなって、人間的でなくなっているそれが孤独である。孤独でさみしい気持ちを海にぶつけているみたいである。どことなくこの人の気持がわかるみたいである。

※ この詩は、よくわからない、人魚が何を表わしているのか、海がなぜ空を呪っているのか……。

この人魚のもつ意味だが、僕が思うには、完成された人間をさしていると思う。つまり、海は、生育の場、空は完成の場、だから海は空を っている。いつまでも完成されたいから。

※ 詩の意味がよくわからないが、実に神秘的な、少し恐怖感を覚える詩だと思う。海とは自分の人生だろうか。北の海とは、人間の孤独さを象徴的に表しているように思える。孤独で押しつぶされそうなのだが、人を恨んでもしかたがない、だから、何も知らないような顔をしている”空”を恨むより、 ってしまうのだろうか。いつまでもその いは消えないのだろうか。人間の孤独と寂寥感がしみじみと伝わってくる詩だ。

(資料4) 二次感想(2人の生徒作品)

※ 全体を通して非常にリズム感があり、口調がよいので口ずさみやすい。

作者の海の前に一人立ちつくす姿が想像されるが、この詩を読んでいると、自分自身も又、海を前にしているような気がする。それも、真冬の日本海を。

この詩で素晴らしいのは、過酷な大自然の海に、人間の創造物である人魚をもって来た点だ。いかにも、皮肉っぽく、しかもその皮肉は 自分自身の甘えに強く投げかけられている。

気分の良い時には共感できない詩だったが、真刻に自分を考えたりする時に読むと、なかなか、良い詩だと思う。

※ 孤独と寂寥がしみじみ伝わってくる詩だ。夢を持っていたのに、現実のさびしさというものを知って、神に裏切られたような気持ちになったのだろう。しかしこういうとき、うらむような相手もないからしかたなく空を呪っているのだろう。泣くこともわめくこともできずに、ただ空をにらんでいる作者が目に見えよう。灰色の空の下、三角波をたててうねる海は、まさに世の中の暗さそのものだと思う。夢を奪われた作者の心情とともに、借景的な情景が、神秘的にも感じられた。

(資料5)

「羅生門」の鑑賞文を書く前のメモ

組番号 () 氏名 ()

※注1. このメモ用紙には「羅生門」をどのくらい読みとったかを確かめるために、鑑賞の内容(素材)を、主題・文章構成・文章…などについて書き整理してみるののである。

2. 原稿用紙に書くときは、これらの素材の中から適当なものを選ぶようにせよ。

一. 作者はこの作品を通してどういうことを述べようとしているか。感ずるところをまとめよ。

(主題)…A

二. どんなあらすじであったか(文章構成)…B
その中で最も強く感動(生き生きして書かれて)しか場面は? (展開)…C

三. 文章について、次の諸点について感ずるところがあれば、メモをせよ。

時代背景や場面情景が主人公にどんな影響を与えるように書いてあるか。(情景)…D

主人公についての動作、表情が彼の心理の推移にどう関係しているか。(心理)…E

用語、文体、表現について感ずるものがあれば書け。(表現文体)…F

四. 題材の選び方について気がついた点を書け。(題材)…G

五. 書き出し、筋の運び、文の結び(文末表現や作品の終結部分の効果)などについて感ずるところを書け。(文章力)…H

※注 鑑賞文を書くときには、上のA~Hまでの「素材」の中からどれを選んで書いたか。その素材の記号を の中に書け。

選んだ素材記号

(資料6)

※ 「羅生門」の二次感想(鑑賞文)を書くときに生徒が選んだ素材とその数

素材	A	B	C	D	E	F	G	H
数	53	22	31	19	18	25	12	15

※ 参考文(資料9~13)にとりあげられた素材

素材	A	B	D	E	F	H
数	4	2	3	1	3	2

Aの主題に関するものが多い。

(資料7)

「羅生門」の鑑賞文

※注 左のA・F・Hは素材の記号

A 私が初めて、この「羅生門」を読んで、感想文を書いた時に、私は、下人が老婆の着物をはぎ取って外へ飛び出して行った時の勇気ではないと思うと書きました。でも、それはまちがいであったようです。この時の勇気、門の下では下人に欠けていた勇気、それは、盗人になることを肯定する勇気だったのです。

私は、下人にこの勇気がわいてきた時、人間の心の中を見たような気がしました。うえ死にしないためには、悪いとわかっていることでもやってしまう。人間は、自分中心に物事を考えてしまったり、自分さえ良ければいいという考えになってしまうことがある。これは、私たち人間に、欲というものがあるからだと思えます。作者である芥川龍之介は、この作品を通じて、人間の欲望について、そしてそれは、時によっては醜いものであるということを書いたかっただけではないかと、私は思いました。

F 芥川龍之介の文章で、用語、文体、表現法などで気づいた点は、最初の方で、自分のことを自分で、「作者」と書いていたりするなど、説明口調を用いていることである。下人のその時の立場、下人が羅生門の下で雨やみを待っていた理由などが、くわしく、またわかりやすく説明されている。

また、このへんのところで、前に出たことをくり返し用いる、反復法が使われている。これは、読者にそのことを印象づけることができる。それにこの場面では、下人が、途方にくれて、何をしようかと迷っている姿を表す効果がある。

途中、過去形の中に現在形が使われている部分がある。これは、その現在形の文を過去形で書いた時とくらべて、読者が、そのことがらを、より身近に感じることができるという効果があると思う。

H この羅生門の書き出しの一行は、これから何かが初まるんだという印象を強く受けた。読者に期待を持たせる効果があると思う。

結びの一行は、しり切れとんぼという気がしないでもなかったが、余いんを残し、読者に結末を自由に予想させることができる結びだと思う。

(資料8)

※主題(A)だけをとりあげて書いた作文の例

人間には欲望がある。そしてその筆頭にあげられるのは、生への執着心ではなからうか。

下人の心にはやはりそれが深く根ざしていた。それ故に、彼は、あの様に苦しみ悩み、遂には悪の道へと走ってしまうのである。これを果して簡単に「エゴイ

ズム」と呼んで終わらせてしまってよいものだろうか。私はそこに疑問を持つ。

確かに人道に外れた行いをし、生きてゆこうというのは、利己的であり、エゴイズムと呼ばれても仕方がないであろう。しかし、私はそこに、盗人になりながらもよいから生きたいという人間を見出し、深く共感を覚えるのである。ここでもし、下人が飢死するとするならば、おそらく読者達に何の感情もひきおこさなかったであろう。

なぜなら、人間かそのように弱いものであるからこそ、我々はお互いに愛することができるのではあるまいか。又、この「弱さ」は裏返してみれば、「生きたい」という情熱だと私は感じる。つまり、飢死するということは、一見きれいに思えるが、実は情熱を失った人間ではなからうか。もちろん死人の中には、生きたいと願い、無念の涙をこぼしながら死んでいった者もあるだろう。しかし、私は、生きるためには何でもするといった者の方が、はるかに人間らしい生き方をしていると思う。

人間とは哀れな生物である。善の方向へも、悪の方向へも全く衝動的に行ってしまう。どちらに傾くとしても何か根拠をつかめばそれでいいとして、まっしぐらに、そのまま進んでゆくのである。この小説の下人がよい例である。しかし、それが人間というのだと思う。作者は、彼を古典の中の人物として登場させている。これが作者のうまい所だ。人々はこの小説を読み、現代にも通ずる所があるのに気づくだろう。それは作者がこの話を故実として伝えたいのではなく、この小説を通して愛すべき人間の弱さ、もろさ(エゴイズム)をあばき出して、人々に考えてもらいたいと思っているからだろう。

羅生門—この題からみてもわかるように、そこには人間の欠点が集約されている。しかし私は、それをただ憎み、そこから目をそむけるのではなく、それを補う力が人間にあるのだということを信じたい。また人間はそうであるべからう。

(資料9)

※「母の青春」 「聞き書き」の生徒作品

母が、高校を卒業した頃、社会は、戦後の混乱から、やっと落ちつきをとりもどしていた。昭和30年である。

卒業後の母は、親に負担をかけないで、自分の力だけで生きようと、一生懸命だった。この時が、自分の青春だったと母は言う。

母は、高校卒業後、自立の準備のために、洋裁学校へ行きたかったが、家が貧しかったため、行く事ができなかった。そのため就職先を捜していた母は、ある募集広告を見た。歯科の手伝いをしながら、歯科衛生

士の資格を取らしてくれるというのだ。事務的な仕事はいやで、何か資格をとって働きたいと思っていた母は、この募集に申し込んだのである。歯科衛生士というのは、戦後にできた、当時としては、めずらしい職業で、雑誌などにも、最新の職業として載っていたという。自分一人だけで、生きたいという気持ちの強かった母は、働きながら学べるということが、魅力だったという。

試験にうかり、採用される事になった。月曜から土曜日は、愛知県歯科衛生士養成所にかよひ、日曜日は、歯科で、手伝いをしたという。このように、休日のない生活が一年間つづいた。この養成所は、当時この地方では愛知県にしかないので、東海各地方の歯科医の娘などがきていたという。母は、ここで勉強し、国立病院などへ、研修にも行ったという。

ふつう、養成所などには、修学旅行はないのだが、母達は、修学旅行をさせてくれと、所長にたのんだ事があるという。しかし学校からは、行かしてもらえず、自分達だけで、修学旅行をやったという。たった1年間だけの養成所の生活だったが、この時のクラスメートとは、今でもつきあいがあるという。

こうして、卒業試験をうけ、国家試験をうけ、歯科衛生士となった母は、それまで日曜日だけかよっていた歯科に、正式に採用されたのである。その頃の歯科は、だんだん組織化され、急速に進歩しつつある時であった。

母の勤めた歯科は、その先頭をいく施設・器具をもっていたという。はじめて、ビルの中に歯科を独立させたうちの一つであった。母の勤めていた歯科は、当時の丸栄デパート専属の通訳を呼んできて話したという。

このような歯医者で、目のまわるようないそがしい中で働いていた母は、歯科衛生士も、歯科医について

いなければ仕事ができないと思い、自分一人で、身をたてようと考えたのだった。そして、昔、進みたかった洋裁学校へ通よおうと決心し、高校を卒業してから8年間働いた歯科をやめたのだった。母は、洋裁学校の校長に、直接会い、ある程度洋裁ができるので、第2学年から入れてもらう事と、親に負担をかけたくないの、もし、教材費などが自分の力で払えなくなった時には、助けてもらいたいという事を、たのんだという。こうして貧しいながらも、デザイナーを夢みた生活がはじまった。四時に学校が終り、それからすぐに歯科へアルバイトへ行って、学費を稼いだという。一年間、このアルバイトは続いたが、その歯科医とけんかをして、やめてしまったという。意志の強い反面、気も強かったのだろう。洋裁学校に入って、1年半、あと半年で卒業という時に、母は、父と結婚した。それで残りの半年、新婚生活をしながら学校へも通ひ、3月に卒業した。

母はデザイナーとして、就職する事はなかったが、家計を助けるために、服の仕立てをしたり、洋裁の塾を開いたりした。私が子供の頃、学校から帰ると、母はいつも服地を手にして洋裁をしていたのを思い出す。

親には絶対負担をかけたくないという気持で、母は、常に行動していた。そして、自分一人で、生きていこうという気持ちでいっぱいだった。母のこうした強い気持は、自分の家庭での、嫁、姑嫁の、いやらしい関係を見て、結婚というものへのあこがれが全くなかった事から出てきたという。結婚というものを、人生のすべてと考えがちな女とはちがって、母は、自分の人生を、自分で考えたのだと思う。母は、この時が、今から思えば青春だったと言う。母が、いっしょうけんめい考えて進んできたように、私も、これから進んでいきたいと思う。

〔Ⅱ〕 古典 I 乙 における 表現 指導

—— 徒然草の読解をふまえた鑑賞文の指導 ——

斉 藤 真 子

A ねらい

① 古文においても「現代国語」と同様に、読み味わうものとして受けとめさせる。これは、中学における古典の取扱いからも、また、古典と現代国語を統一したものとする「国語 I」の設定から

も当然といえる。

② 自分の考えを文章化する前段階で、授業内容を整理し、理解がなされているか再確認させる。

③ 作者の物の見方、考え方を自分なりに、共感的比判的にとらえることによって、自分の考察をまとめさせる。但し、読解に重点をおくので、作品